

# 独り立ち

終戦直後、突然の独り立ちを迫られた私は、空へのがれから飛行機のそばで何か仕事をしたいと思った。戦争を通じて米国のすばさには感心していた

## 私の履歴書

江頭 匡一  
えがしら きょういち

⑤

は卒業できることになった。そこで友人の助けを得て書いた「緊急退避法」という卒論を手に東京に向かった。

明治大学に提出した帰り、肩の荷を下ろしたような気持ちで駿河台の坂を下りながらふと疑問がわいてきた。「戦争でほと

んど勉強していない。このまま大卒の肩書だけもらって、これで本当にいいのだろうか。下手に肩書があれば、かえってそれ

### 米軍でコック見習い

#### 結婚を機に電気工事会社

に頼った人生しか送れなくなる」。そう思うと矢も盾もたまらなくなり、私は思わず踵(きびす)を返して大急ぎで学生課に引き返した。

「書き直したいところがあるから」と言っ、いったん提出した卒論を返してもらい、そのまま校門を出ると、思い切り破り捨てた。それは、肩書に頼らず自力で生きていくことへの覚悟でもあった。あのとぎの自分

を今でも私は誇りに思う。米軍基地でのコック見習いの仕事は厳しかった。朝から晩までじゃがいもの皮むきやなべ洗いが、食事も十分でない当時のこと。一日二食付きというのは大変魅力だった。

復員姿やジャンパー姿がほとんどで身なりなどかまっていられない時代にもかかわらず、私は背広にネクタイというきちんとした身なりで通勤した。元パ

イロットで、下手な英語でもものおじしないで話す私を基地の人は特別に目をかけてくれた。当時、米兵たちは「キルロイ」という名の架空の人物をアイド

ルにしている、世界各地の戦地で先発隊が後続部隊のために、道路沿いの家の壁や石に「Kiroy was here」と書いて目印にしたりしていた。たまたま「きょういち」の発音が似ていたので、いつの間

にか彼らは親しみを込めて、私を「キルロイ」と呼ぶようになった。同僚たちともよく遊んだ。当時の娯楽といえば映画館とダンスホール。このころ、妻の憲子とも知り合った。



新婚当時の妻憲子⑥と筆者

憲子の父は、九州大学医学部を卒業後、大学前で整形外科の

大穂綾夫氏らと四人で、電気工事会社の昭興電業社を福岡市内に設立した。大穂氏らは満州電業から引き揚げてきた電気の技術者で、最年少の私が社長になった。

水野病院を開業していた。彼女は三人姉妹の末っ子だが、すでに姉二人は嫁いでいた。だから父親としては彼女に医師の婿をもらって病院を継がせたかったようだ。当然、私との結婚話には猛反対した。

開業は、一九四六年十一月二十日。福岡の街も戦後の復旧が進み、中心部に新天町商店街が完成した。同時に私の店と事務所もその一角につくった。私の事業家としてのスタートであり、私たち夫婦の門出の日でもあった。

社の下請けの仕事が始めた。ペンチを腰につけて電柱に登ったり、天井裏をはいずり回った。志賀島の裏手側まで電気をひくため、島の裏側からひと山越えて反対側まで山中に何本もの電柱を立てたこともあった。

仕方がなくコックを一年余りでやめ、後にロイヤル入りした

(ロイヤル創業者取締役)